影なる王女

第五章

海柘榴市は、難波の王宮より東へ生駒の山を越え、先の大王の王宮のあった纏向のやや南、三輪山の麓にあった。

市とは、様々なクニより様々な人が集い、物品を交換する場であった。すなわち、海柘榴市より山を越えた東向こうは、ヤマトの大王家にまつろわぬ蝦夷どもが住む異界であった。

四年前、皇后の命を受け、五百の兵が蝦夷を討つべく、この海柘榴市より東に向かった。その兵どもが、二十を越える蝦夷のクニを討ち平らげ、その王を服属させ、ヤマトに帰還してくる。

すでに日は落ちかかっていた。

海柘榴市には、木組みの壇が設えられ、壇上には息長皇后と稚建皇子が、壇の周りには大伴金村以下ヤマトの主だった豪族たちが、さらに楽人や俳優どもが、赫々たる勲を樹てて戻ってくる征東軍を出迎えに、集っていた。

やがて、征東軍が現れた。

出発の折りには五百の兵が、三年の戦の間に、討ち死にした者、苦しさに耐えかねて逃走した者、征服したクニに押さえとして残した兵どももいて、帰還してきたのは二百に

足らなかった。
いずれも、甲冑には傷と錆が目立ち、片腕を失った者、眼を一つ失った者、鼻先に引きつれた傷を負った者も少なくないながら、矛を縦に構え、胸を張り、二列に足並みを揃え進んでくる。
列の先頭に、降伏し俘虜となった蝦夷の王が二十人、下部どもに、鉱物や玉、木の実や山菜などを持たせ、左右をヤマトの兵どもに固められて歩いていた。
その後ろに、馬にまたがった将軍が二人。
一人は、丈高く、精悍な面構えに強い髭を生やした二十五歳の男。重臣・平群真鳥の子・鮪。
一人は女であった。髪を短く切りそろえ、胸に当てた甲冑が胸乳を豊かに盛り上げ、しなやかに伸びた白い腕や脚をさらした十九歳、葛城円の娘、韓媛。
皇后と皇子のいます壇の前に、平群鮪と葛城韓媛が膝をつき、その後ろに整列した兵士たちが、声を張り上げた。

蝦夷を　一人百人と
人は言えども　手向かいもせず

吾が兵よ　吾が兵よ

神風の　伊勢の海の
大石に　這い回れる　細蝦の如く
撃ちてし止まん
撃ちてし止まん

古い久米歌であった。久米とは、かつて御真木の大王がヤマトに国を築いた折りに従った兵どもを言う。久米歌は、大王の華々しい征服の物語を歌に詠んだものをいう。
……東国の蝦夷は、一人で百人にあたる剛力の兵であると言うけれども、こちらに手向かうこともなく服属した。
兵士たちよ。神聖な伊勢の海に這い回る貝のように、必ず敵を撃滅しよう……。
つづいて、蝦夷の王たちが進み出て、貢ぎ物を壇の前に並べた。珍獣、玉、鉱物、干魚、木の実などである。その土地の産物を献上し、服属の証としたのである。
皇后が立ち上がり、謡った。

倭は　国のまほろば
たたなづく　青垣
山隠る　倭し　うるわし

みつみつし　久米の子よ
まつろわぬ　賊ありて
美まし　倭を
竊まんとす
撃ちてし止まん
撃ちてし止まん

兵どもが、盾や弓弦を鳴らして、皇后の返歌を讃えた。
大将軍の平群鮪と葛城韓媛が立ち上がり、謡った。

海行かば　水浸く屍
山行かば　草むす屍
大王の辺にこそ死なめ
返り見はせじ

同じ歌を豪族や兵士どもが唱和し、儀式は終わった。
つづいて祝宴となった。篝火が盛大に焚かれ、昼のように市を照らした。酒の入った瓶や、魚や木の実、山菜を盛った皿が並べられ、楽人が賑やかに曲を奏で、俳優が舞い踊り、

謡った。
「平群鮪、葛城韓媛、此処へ」
息長皇后の手招きに、甲冑を脱いだ鮪と韓媛が、拝礼しつつ歩み寄り、膝を突いた。
「三年の戦の間に、数々の面白き物語もあろう。後に稗田の史人の記するところを読むが、まずは汝らより聞きたい」
「諾」
二人の将軍は、快活に応じた。その朗らかな声は、難波の宮処では長く聞くことがなかった。誰もが、思うところを正直に言わず、その言葉の裏に秘めた真意を隠そうとし、さらにそれを探ろうとするがためか、声は曇り、言葉は濁った。
「貢を捧げた蝦夷王に、腰を屈め、脚を引き摺る者がいた」
皇后の問いに、鮪は少し首を傾げた。
「熱田の王である」
葛城韓媛がすぐさまに応えた。
「熱田の王は何故に、あのように歩く」
「ふぐり玉がなきが故に」
「ふぐり玉が？」
皇后が、興深げに訊ねた。
「吾が潰した」

韓媛は、涼やかな眼差しを変えずに、淀みなく応えた。豪族たちが、思わず肩を引き、貌を強張らせる気配がざわざわと伝わってきた。
「熱田の兵の剣は、ヤマトの剣よりも剛(つよ)かった。吾(われ)は、熱田の王と剣を合わせた。吾の剣は、根本より折れた。吾は詮方なく、熱田の王に組みつき、ふぐり玉を潰して倒した」
隣でそっと平群鮪が袖を引き、父の葛城円が制するように手を動かしたが、韓媛は平然と続けた。
「熱田には、よき鍛冶(かじ)が多くいた。三人、ヤマトに連れてきた故に、ヤマトの剣をより剛く鍛えさせよう」
「葛城円」
皇后は笑いながら、韓媛の父親であり、葛城一族の長(おさ)を見た。
「汝が娘は、蝦夷の王のふぐり玉を潰し、憚ることなくそれを語る。汝が娘と寝屋(ねや)をともにする男(をぐな)はおるまい」
葛城円は白い髭に半ば覆われた唇を歪めて笑い、首を振った。
「韓媛が征東の戦に加わった時より、諦めている」
豪族たちは笑った。
三年前、征東軍が出発した折り、葛城の兵を率いる大将軍は、円の弟、すなわち韓媛の叔父だった。韓媛は、幼い頃より武を好み、十六歳にして一族のうちに剣技、組技ともに叶う相手はいなかった。韓媛は自ら、従軍を望み、制する声に耳を塞いだ。

一年後に叔父が討たれた後は、韓媛が将軍として軍をまとめた。武勇に秀いで、闊達で邪気のない韓媛には、兵たちもよく従った。二十のクニを平らげるにあたって、平群鮪よりも韓媛により多く功があることは明らかだった。
「しかし、韓媛はこの美しさ、三年の間に懸想した者はいなかったか」
皇后の問いに、韓媛は屈託なく応えた。
「いた。この鮪である」
豪族たちが、おお、とざわめいた。韓媛に己が名を口にされ、鮪は貌を赤らめ、韓媛の袖を引いた。
「汝は如何に応えた」
皇后の問いに韓媛は、
「寝屋に忍んで来た故に、ふぐり玉を蹴った。潰してはいない」
と応え、鮪は貌を赤らめて俯き、豪族どもは大笑した。
「皇后」
平群鮪は居住まいを正した。
「その熱田で聞いた話である。旦波(たにわ)の北に高志(こし)なるクニあり」
「高志」
旦波は、ヤマトの北辺、淡海(おうみ)の北の山を越えた地にある、いまだまつろわぬクニである。
「その高志に、ヤマトの大王家の裔(すえ)がいますとの風聞を聞いた」

豪族たちがざわめいた。
「大王家の裔……」
皇后は息を呑んだ。鮪は続けた。
「御真木の大王の弟、彦湯皇子の三世の孫と聞いた」
その瞬間、皇后の眼が一瞬光ったのを、大伴金村は逃さなかった。

大伴金村は、皇后から離れて春日郎女とともに俳優の舞に見入る稚建皇子を見やった。
いま、ヤマトの大王の御位を継ぐ皇子は、稚建皇子しかいない。先の大王が崩御して後の内紛で、大王家の血を引く多くの者が命を落とし、戦が終わって後も、かの押歯皇子のごとく、皇后によって排された。ただ一人の日継の皇子の母たることで、息長皇后はその威光を保った。大伴金村は、娘の春日郎女が稚建皇子と睦むことで、ヤマト随一の豪族たる地位を固めた。
半年前、吾田媛の忘れ形見である影皇女が金村の邸を逃走した。稚建皇子は、己の母が息長皇后ではなく、皇后に謀殺された吾田媛であることを知った。以来、皇子は金村の邸内に建てられた仮の宮に、春日郎女と影皇女とともに住んでいる。日継の皇子を手の内におさめたことで、金村の威勢は今や皇后に勝っていた。
だが、北の高志に、大王家の血を引く者がいるとなると、話は違ってくる。
「高志に……」

皇后が大仰にため息をつき、何度も頷いた。
「その風聞がまことか否か、確かめねばならない」
皇后は貌をあげ、豪族たちを見回した。
「高志は旦波の北。その高志に至るとすれば、まずは旦波を討ち、旦波の王を服属せしめねばならない」
豪族たちの眼差しが己に向けられていることを、金村は感じていた。
いま、まつろわぬクニを討つ兵力を有しているのは、大伴に他ならない。平群も葛城も、三年間の征東で多くの兵を失い、また、押さえとして少なからぬ兵を東に残している。
もし、旦波に兵を出すとなれば、百や二百ではきかない。大伴が動員できる兵力は五百余。難波に百も残せるかどうかも分からない。難波に戻れば、皇后はすぐさま朝儀に先立つト占で、旦波への出兵を決めるであろう。さらに、皇后は意のままに大伴の兵を難波から追い出すことが出来る。
輝かしい軍功を携えて二百の兵とともに帰還してきた平群や葛城と、皇后と手を結べば、力関係は逆転しかねない。豪族どもは、ヤマトで突出した力を有する大伴に好意を抱いていない。
大伴が、兵を北に遣わしている間に、先の大王を殺し、吾田媛を殺した息長皇后がどんな謀を行うか。その謀に抗しうる策はあるか。金村は忙しく、腹の底で思案をめぐらせた。

「また戦か」
葛城韓媛が、うれしげに叫んだ。
「ならば、吾も行く」
「韓媛」
父の葛城円が娘の袖を引いた。皇后が笑った。
「三年の戦が終わってすぐに、葛城の兵を北に向けるわけにはいかない」
「ならば吾一人でもよい。戦の列に加わりたい」
豪族たちは笑い、口々に、北への軍を語り始めた。皇后が、し得たり、という面もちで、そっと金村を盗み見た。
「皇后」
不意に金村は立ち上がった。
「旦波討ちの議、卜占にも朝議にも諮る要もなし。吾が弟、羽生を将軍となし、四百五十の兵を差し向けよう」
豪族たちは息を呑んだ。四百五十の兵を北へ出せば、難波に残る大伴の兵力は五十余。ヤマトにおける大伴の軍事的優位は消滅する。
「平群真鳥、葛城円」
金村は、呆然とした面もちの二人の老豪族を見やった。
「王宮を守る兵のほとんどは、吾が大伴の兵。旦波に四百五十の兵を出すとなれば、王宮

の守護に吾が兵を当たらせること能わず。汝らが兵で王宮を守るべし」
二人はそろって皇后を見やった。
皇后は、胸にわだかまる疑念を見せぬよう、固い面もちを保っていたが、やがてゆっくりと立ち上がった。
「大伴金村、よくぞ言いたり」
金村は拝礼した。背を丸めて額ずく彼を見下ろす皇后の眼は、冷ややかに曇っていた。
祝宴はいつしか、歌垣の場となった。
歌垣とは、未婚の男女が集い、歌を交わして妻問いする祭りをいう。身分の垣根は取り払われ、貴なる者も、賤なる者も、ただの男と女として楽しむ。
夜が更けるにしたがい、皇后は宮女どもを伴って仮の宮へと帰って行き、壮齢の豪族どももまたそれぞれの宿へと消えた。
「皇子」
すでに、俳優どもの舞に見入りつつ、もの思いにふけっていた皇子の周囲から、一組、また一組と男女がいずくかへ去っていった。林で、草むらで、岩陰で、彼らはまぐわい、快を尽くす。
皇子が貌をあげると、春日郎女が立っていた。
「宿へ戻るべし、と父が言う」

「金村が」
「宴(うたげ)は、歌垣となった。妻(め)ある皇子は、歌垣に加わることもない」
郎女は、物憂げな眼差しで、そこかしこに繰り広げられる、眼を欲望で滾らせた男女の掛け合いを眺めつつ言った。妻とは、むろん、郎女自らのことである。
「談合したい事もあると、父は言った」
「談合？」
「皇子は知らぬか」
郎女は呆れたように言った。
「旦波に兵を出すことになった。吾が大伴は四百五十の兵を旦波に差し向ける」
「旦波……」
腑に落ちぬ面もちの皇子に、郎女は苛立たしげに語気を荒げた。
「平群や葛城の兵二百がヤマトに戻った。吾が大伴が四百五十の兵を旦波に差し向ければ、大伴の守りは薄くなる。皇后が、いかなる謀をめぐらすか、分からぬ」
皇子は、なおも朧(おぼろ)な眼差しで問うた。
「しかし何故に旦波に」
「皇子は聞いていなかったのか」
郎女は膝を突き、皇子に耳打ちした。
「旦波の北の高志なるクニに、御真木の大王の弟の三世の孫ありとの風聞を、平群鮪が持

ち帰った」
皇子はなおも、首を傾げた。すでに稗田の史人の物語の人物でしかない御真木の大王に、弟がいたなど聞いたこともない。さらに、その三世の孫が何故、遠い高志にあるのか。まして、大伴が四百五十もの兵を差し向けるのは何故か。
「分からずともよい。仮の宮に戻ろう」
郎女は、皇子の袖を引いて立たせた。

宴の場は、海柘榴市の中央、小高い丘の上に設けられ、その麓に仮の宿が丘を囲むように建てられいた。皇后の仮の宮が、大伴が建てた稚建皇子の仮の宮の真裏に、丘を挟むように建てられたのは、偶然ではない。
皇子と郎女は、木立や草むらに挟まれた小道を下った。
ところどころ暗い茂みの陰より、男女の呻きや囁きや、密やかな笑い、身と身が触れ合う音、隠微な体液の匂いが、夜気に乗って伝わってきた。
ふと、皇子が足を止めた。
皇子の眼差しの先を見やれば、木立の合間より、草むらの上に脱いだ衣を敷き、躯を重ね合う男女の姿があった。
男は女に覆い被さり、身を前後に激しく動かしている。女は、仰向けに男の二の腕をつかみ、貌をしきりに左右に振り、荒く息を吐き出していた。

歌垣の場では、ありふれた光景でしかないが、皇子は身じろぎもせず、からみあう男女を凝視していた。

それは、皇子が見たこともなく、為したこともない、男女のまぐわいであった。

大伴金村の邸内に建てられた仮の宮で、皇子は、昼は影皇女と親しく語らい遊び、皇女が寝入って後は、寝屋で郎女との秘め事に耽る。ふぐり玉を痛めつけられ、郎女に陽物を吸われ、果てて後、郎女は皇子の躯の上に覆い被さり、独り自らを慰める。それが二人のまぐわいであった。

ともに鍛えられた、美しく逞しい四肢をさらけ出し、野の獣のように激しく身を動かし、あたりはばかることなく快を尽くすその姿には、歪んだ作為がない。

春日郎女は眼を背け、

「皇子……」

と低く声に出して囁き、袖を引いた。

その声が聞こえたかのように、男は貌を上げ、動きを止めた。

平群鮪であった。

鮪と皇子は、しばし見つめ合った。鮪の眼は、己を見つめているのが他ならぬ日継の皇子であり、その妻である春日郎女であることを認めていた。歌垣の場でなければ、彼はすぐに身を起こし、裸身のままであれ、拝礼するべきであろう。

皇子に見つめられ戸惑う鮪を、仰向けに伏した女は不審げに見上げ、首を曲げてこちら

を見た。

葛城韓媛であった。

「稚建皇子か」

韓媛は、狼狽する様も見せず、汗にまみれた貌を広げて、けたたましく笑った。

「かような態にて礼もできぬが、今宵は歌垣ゆえに、容赦されよ」

韓媛は、手を伸ばして鮪の首をつかみ、横倒しに押し倒して馬乗りになり、自ら腰を動かしはじめた。

「はじめ、鮪が吾に懸想したが、吾は拒んだ。しかし、戦を重ねるにつれて睦(むつ)みはじめた。鮪は吾に劣らぬよき兵。吾らは、大王の家の御盾(みたて)となる強い子をなそう」

春日郎女に促され、やっと足を動かして歩み始めた稚建皇子は、その眼差しを宙に漂わせ、心ここにあらずの態で、しばし路傍の石に躓(つまづ)き、その都度、郎女に腕を掴まれた。

「皇子！」

郎女は立ち止まり、皇子にまっすぐに向き合った。

「何故さきほど、皇子は葛城の女を咎(とが)めなかった」

皇子は、眦(まなじり)を引き裂くばかりに怒りをこめて言う郎女に、首を傾げ、瞳を四方に動かした。

「葛城の女は、非礼をなした」

「歌垣ゆえに……」
眼を逸らそうとする皇子に、郎女は苛立たしげにその胸ぐらを掴んだ。
「いずれ大王の御位に即く日継の皇子。臣の非礼を咎めねば、大王家の御稜威(みいつ)は危うくなる」
郎女の眼に、涙が浮かんでいた。
彼女の苛立ちや怒りは、歌垣の場で、あれほど男女のまぐわいの気配に包まれ、その行為を見せつけられ、しかし何もしようとはしない皇子に向けられていることに、郎女は気づこうとはしなかった。
あるいは、半年前より大伴金村の邸に移ってより、皇子が郎女よりも、妹なる影皇女と過ごす時が多くなったことへの妬みであることにも、気づこうとはしなかった。
「郎女……」
皇子は、郎女の手に胸を圧せられ、顎を浮かしながら声を振り絞った。
「男(をぐな)と女(をみな)は、あのようにまぐわうものなのか……」
郎女は眼を見開いた。口が半ば開き、強張っていた貌(かお)を緩めて、皇子を見上げた。しばし皇子の怯えた面もちを見つめ、彼女の陰(ほと)が、皇子の陽物を受け入れたことがないことを、思い出していた。
「皇子は……」
郎女は、面もちを固くして問うた。

「あのようなまぐわいを、なしたいのか……」
葛城韓媛と平群鮪がなしたようなまぐわいでは、快を得られないことは、分かり切っているではないか……。
父なる金村の言が、春日郎女の脳裏に木霊(こだま)（こだま）した。
未だ、子はなさぬのか……。
郎女は重ねて問うた。
「吾と、あのようにまぐわいたいとは、思わぬのか……」
皇子は俯き、応えなかった。郎女の唇が、かすかに歪んだ。彼女の膝が、思い切り突き上げられた。
皇子は身を折った。郎女の膝が、その股間に食い込んでいた。
「吾は、まぐわいたい」
郎女はそう言い、皇子を仰向けに押し倒した。彼の腰の紐を解き、袴(ズボン)を半ば脱がせ、やや硬さを帯びた陽物を唇に含み、指をふぐり玉に絡め、強く圧した。皇子の全身が強張り、口から呻きが漏れた。郎女はますます指に力をこめた。皇子は身悶えし、陽物はその鎌首をもたげ始めた。
郎女は、己が袴(スカート)を脱いだ。韓媛が鮪にそうしたように、皇子にまたがり、陰を陽物の先端にあてがい、深く腰を沈めた。
郎女に組み敷かれ、皇子は怯えた眼で彼女を見上げた。郎女の眼は、喜びに満ちた野の

獣のような、鮪とまぐわう韓媛のそれとは異なっていた。冷静に矢を構えつつ獲物を見据える狩人のそれであった。郎女は腰を動かしていた。陰で陽物をくわえ込み腰を動かしつつ、なんら快を覚えていないことは明らかだった。皇子の陽物は、なま暖かく濡れた肉の襞(ひだ)に包まれつつ、硬さを失い、柔らかく縮み始めた。

郎女の指が、再び皇子のふぐり玉に絡みついた。皇子は仰(の)け反(ぞ)り、身を激しく振るわせ、その陽物は雄々(おお)しくそそり立った。

「皇子よ……」

郎女は、皇子のふぐり玉のかたちが変わるほどに強く圧しつつ、その耳元に唇を寄せ、言葉をねじ込むように言った。

「これが男女のまぐわい……」

皇子は苦しげに貌を左右に振った。郎女は、激しく腰を上下させ、息遣いも荒く言った。

「何故に男と女はまぐわうか、皇子は知るまい」

郎女の指のなかで、皇子のふぐり玉は、そのうちに溜まった血が逆巻き、破裂せんばかりに脈打っていた。

「子をなすためである」

郎女は、皇子の耳たぶを噛んだ。歯が食い込み、血が噴き出した。

「皇子はいずれ大王の御位に即く。吾は皇子の妻、いずれ皇后(おおきさき)となる。吾らは、大王家の御稜威を、永遠たらしめねばならぬ」

皇子の眼と唇が大きく見開かれ、総身が細かく波打っていた。

「吾らは、子をなさねばならぬ……」

皇子の陽物から精が迸(ほとばし)り、郎女の陰のうちを暖かく満たした。郎女の全身を、歓喜が貫き、彼女は身を仰け反らせ、それを受け止めた。そして、力が抜けたようにばたりと皇子の身に己が身を投げ出した。

「皇子……」

郎女はいとおしげに皇子の頬を舐め、その頭部を抱き、己が胸乳(むなち)に押しつけた。

「そう……。皇子が妻は吾のみ……大王家の子は、吾が腹に懐く……」

彼女は、狂おしく皇子を抱き、身をくねらせ、快の余韻に浸った。

「皇子……？」

郎女はふと、動きを止め、身を起こした。皇子は白眼を剥(む)き、口から涎(よだれ)が垂れていた。

「皇子」

郎女は、皇子の肩をつかんでゆすぶった。皇子は、石のように動かなかった。郎女は狼狽えた。右手で、己が髪を掴んだ。その指に残る感覚が蘇(よみがえ)ってきた。

皇子が精を漏らした瞬間、たしかに彼女の指は、それを感じた。

皇子から身を離し、むき出しになったその股間に眼をやった。陽物はそそり立ったまま、その先端から赤い液が漏れていた。陰嚢の右側が、異様に膨(ふく)れ上がっていた。

郎女は、腹の底から沸き上がる悲鳴を、必死に押し殺した。左手で口を塞ぎ、右手で皇

子の陰嚢をまさぐった。
彼女は、皇子の右のふぐり玉を、潰していた。
「で、金村の本心は、いずくにあると思うか」
息長皇后は、苛立たしげに立ち上がり、彼女の前に坐す平群真鳥と葛城円の貌を見比べた。
二人の老豪族は、床に眼を落としたまま口を噤んでいた。
稚建皇子を大伴金村に奪われた――彼が奪ったとしか、皇后には思えなかった――息長皇后は、すぐさまこの二人と手を組み始めた。平群と葛城は、ヤマトでも古くから栄えた豪族であり、三年前までその兵力は皇后にとって脅威であった。東国の蝦夷を討つべく、平群と葛城に征東を命じたのは、彼らの力を削ぐためであった。
皇后が征東軍を呼び戻したのは、強大になりすぎた大伴への牽制であった。日継の皇子を住吉の本邸に住まわせながら、大伴金村は、にこやかな微笑みを絶やさず忠実に皇后に仕え、それでいて皇子を王宮に戻そうとはしない。
高志に、大王家の裔がいるという風聞を、皇后は今宵はじめて耳にした。大伴の兵をして旦波を討たせることを咄嗟に思いついたのだが、金村はすぐに、四百五十の兵を出すと明言した。酒席とはいえ、主だったヤマトの豪族が揃った中で。
大伴の腹をどう読むべきか。

葛城と平群の兵を動かせば、四百五十の兵を北に差し向けた大伴から、皇子を奪い返すのは容易であろう。そんなことは、金村は承知しているに違いない。それを承知しつつ、金村は自ら、ヤマト随一の兵力をまつろわぬ民の跋扈する北に出すと言う。
しょせん、平群真鳥も、葛城円も、策において大伴金村に抗しうる者ではない……。
それを承知しつつ、皇后は彼らの兵力に頼るしかない。
金村め……。
皇后は、打つ手打つ手のすべてを読まれ、しだいに追いつめられている己に苛立った。
あの頃は……。
皇后は思った。
十六年前はこうではなかった。彼女には恐れるものは何もなかった。あの猜疑心の深い小心者の大王も、力任せに荒れるばかりの吾田媛も、彼女は恐れなかった。
豪族どものさかしらな謀を、皇后は力で押し潰してきた。強烈な意志で、男のふぐり玉を押し潰して生殖能力と誇りを微塵に砕くように。
なぜいま、こうも怯えるのか。
年をとったせいか。
手に入れた威光を、ひたすら守るしかないからか。
「皇后……」
部屋の入り口に、宮女の八須女が膝をついていた。

「寄れ」
皇后の手招きに、八須女は擦り寄り、耳打ちした。
「まことか……」
皇后は、眼を見開いて八須女を見た。八須女はうなずいた。
「たしかに見た」
八須女は、不審げに首を伸ばしてこちらを見やる二人の豪族に聞こえぬように言った。
「春日郎女が、稚建皇子を、子を産めぬ躯にしたらしい……」

泣きじゃくる春日郎女を前に、大伴金村は無言で腕組みをするばかりだった。
出来うることなら、郎女を思い切り殴打したかった。ここまで細心に、長い年月をかけて組み上げてきた謀が、すべて崩れ落ちかねない事態であった。
眼の前で打ちひしがれ、袖で貌を覆い、床に額づいて嗚咽する聡い娘が、父の意を己が意として疑わず動いたからこそ、稚建皇子は大伴の掌中にある。皇子はいま、熱に浮かされうわごとを漏らしつつ、医師に見守られて床にあるが、己がふぐり玉を潰した郎女を、皇子がどのように思っているか、それを確かめるまで、郎女を責めるわけにはいかない。
それよりも思案を……。
金村は、煮えたぎりそうになる心を必死に静めた。
郎女は、誰も気づいた者はいない、と言い張った。気づかれていないはずはない、と金

村は思った。郎女は、気を失った皇子を、丘の中腹から仮の宮まで、ひとり引きずってきたのだ。
金村は、ふぐり玉を潰される男が、どれだけ呻き、悶え、泣き叫ぶかを知っていた。
十年前、皇后の一族である建内が背いた。皇后は、大伴、平群、葛城を頼り、乱を鎮めた。首謀者は、皇后の叔父であった。叔父は難波の王宮の奥深くに連行された。八須女、香和女が皇后を手助けし、叔父のふぐり玉をあらゆる手を尽くして責め苛んだ。そのころ、まだ女童であった葉津女もいた。最後に、瓜のように膨れ上がったふぐり玉を、皇后は左右の手で破裂させた。大伴金村、平群真鳥、葛城円の三人は、四人の女たちがまだ息をしている老人の陰嚢を引き裂き、潰れたふぐり玉を踏みにじるのを、無理矢理に笑みを作って眺めていた。
あのとき、皇后の叔父が発したおぞましい断末魔の悲鳴を、皇子も漏らしたに違いない。歌垣の場でまぐわいあっていた男女の幾人かがそれを聞き、股間から血を垂らした下半身を剥き出しに、皇子が郎女に引きずられていくのを、必ず眼にしただろう。
稚建皇子は床に伏し、熱にうなされたまま眼を覚まさないでいる。果たして皇子が、子を産めぬ躯となったか否かは、まだ分からない。ふぐり玉は一つ残っている。恐ろしいのは、皇子が子を産めぬ躯になったという風説が流されることなのだ。
子をなさぬ皇子。
大王が大王たる所以は、子をなし、大王家の御稜威を代々に伝えていくからに他ならな

い。すなわち、子をなさぬ皇子は、日継の皇子たる資格を失ったに等しい。
金村は、兵のほとんどを旦波に差し向けると言明した。それを取り消せば大伴の威光は消える。四百五十の兵は、必ず北に向かわせねばならない。たとえ難波に五十の兵しか残らずとも、日継の皇子を掌中に握っていれば、いかようにも策は練れる。皇子が掌中になくば、裸のまま狼の群のなかに取り残されたに等しい。
だが、子をなさぬ皇子は、大伴の盾となりうるか。
否、仮に皇子が恢復することなく死ねば……。
日継の皇子を殺したのは、春日郎女ということになる。
となれば、金村にとって残された策は、ただ一つ……。
否。
脳裏に浮かんだその貌を、金村は首を振って打ち消した。
あれは両刃の剣。その切っ先がいつ、こちらに向けられるかも知れぬ、危うい剣。
金村は、その剣の使いようを謀りかねていた。
しかし……。
策が尽きれば、後に頼るべきは敵を打ち倒す剣の力しかない。
金村は、じっとりと汗の滲む掌で両膝を掴み、ひたすら思案を続けた。

三日後。

大伴金村は、稚建皇子の宮を訪ねた。
かつて影皇女（かげのひめみこ）を閉じ込めていた苫屋（とまや）を毀（こぼ）ち、新しい生木の香の強い宮を、その場所に建てた。
あの海柘榴市での歌垣の夜以来、稚建皇子は、宮ではなく、かつての春日郎女の寝屋（ねや）に臥せっていた。春日郎女はつきっきりで、冷たい水で絞った布で熱く火照る躯を拭ったり、薬湯を呑ませたりしていた。だが、陰嚢の腫れは引かず、意識は取り戻したものの、虚ろな眼をかすかに動かすばかりで、口を開こうともしなかった。
いま、宮に住まうのは、影皇女しかいない。
半年前、苫屋を出でてより、影皇女の面もちからは、かつての猛々しい気が消え、十六という齢にふさわしく、乙女らしい日々を過ごしていた。
宮の扉を叩こうとした金村の耳に、近くから涼しげな笑い声が伝わってきた。見れば、宮の裏にある池の畔（ほとり）で、影皇女が二人の女童（めのわらべ）どもと花を摘んでいた。
女童たちは、摘（つ）んだ花で輪を作り、薄紅色の衣をまとい髪を結い上げた皇女の額を飾った。皇女は池の水面に己が貌を映し、相好を崩した。
「皇女」
金村は膝を突いて拝礼した。二人の女童はすぐに額を地に着け、影皇女は花を胸いっぱいに抱えたまま、金村を見やって微笑んだ。影皇女には、大伴金村が息長皇后の命を受けて彼女を閉じ込めていたことを知らない。兄なる皇子や、その妻である春日郎女同様、彼

女をあの暗い境遇から救い出してくれた恩人の一人と見なしていた。
「皇女は、花を愛(め)でるか」
皇女はうなずいた。言葉を発することはないが、こちらの言うことは理解できるらしい。影皇女は立ち上がって金村に歩み寄り、花を一輪、彼のみずらに刺し、鳥のように首を傾げて金村の頭部を眺め、くすくす笑った。それから首を伸ばして金村の背後を見、真顔になった。
「あ……に……」
ここ数日、姿を見せない稚建皇子のことを訊ねているようだった。
「そのことであるが……」
金村は皇女に擦り寄り、声を潜めた。
「皇子を害した者がいる。皇子は深い傷を負い、床に臥せっている」
皇女は眉を顰め、眼を見開いた。
「その者どもを打ち倒さねば、皇子の命は危うい」

半月後。
大伴羽生に率いられた四百五十の兵が、難波の津(つ)を出発した。
津とは、大きな舟を出入りさせうる入り江のことである。兵たちは三十の舟に乗り込み、海を北上してヤマトの大王家に服属する吉備(きび)に至り、そこから西に向かって旦波を攻める。

遠回りではあっても、淡海より険しい山を越えて攻めるよりも容易であろう。
難波の津には、木組みの壇が築かれ、息長皇后以下、主だった豪族が兵たちを見送った。
雄々しく旗竿をなびかせた三十隻の舟が海原へと漕ぎ出し、水平線に姿を消した後、息長皇后は壇を降りた。壇の下に控える豪族たちが一斉に膝をついて拝礼する。
三人の宮女を従えてゆっくりと歩む皇后は、大伴金村の前でふと足を止めた。
「金村」
大伴金村は貌をあげて皇后を見た。俳優のかぶる面のように固い面もちが、心の緊張を押し隠しているのが伺えた。
「稚建皇子は、如何か」
「いまだすぐれぬ様にて……」
すぐに応えた金村に、皇后は右手を差し出した。掌に、小さな袋が載っていた。
「王宮の医師が煎じた薬である」
皇后は、ちらりと眼差しを金村の貌に向け、静かに言った。
「皇子に呑ませるように」
金村は左右の手で袋を押し頂いた。皇后は歩み去った。
まさか、皇子に毒を盛るなどという下策を弄する皇后ではあるまい……。
金村は皇后の腹をこう読んだ。皇子が重い病であることを、ヤマトの主だった豪族どもに改めて知らしめたのだ、と。

もし、皇子が「病」のために命を落としても、ヤマトは揺らぐことはない。他ならぬ大伴の兵が、高志にいます御真木の大王の弟の三世の孫を求めて、旦波の地に向かったのだから。

いよいよか……。

金村はそっと、唇をかみしめた。

さらに三日。

難波の宮処は、穏やかに過ぎた。

朝議は開かれず、皇后は戦勝の祈願と称して王宮深く籠もり、大伴金村は邸内に籠もることなく、稲の刈り入れの始まった領内を回り、葛城、平群もまた動く気配がない。

その穏やかさが、うわべだけのものであることを、他ならぬ難波に住まう民人（たみびと）たちは感じ取っていた。いかにも民人らしく装った見知らぬ男どもが、田の周りに、野に、川に、気ぜわしく歩いている風景がそこかしこに見られた。

戦（いくさ）が始まる。

民人たちは、何故に戦が起こるのか、誰と誰が争うのか、知りもせず、知ろうともせず、ただ夜になれば長老の屋に集まり、戦に巻き込まれぬ方策を案じあった。

民人に紛れて、密かになにごとかをなす男たちが、三日目の夜、難波の王宮と、平群の邸と、葛城の邸の門をくぐった。

そのしばし後、それらの門が重い音をたてて開き、武装した兵どもが隊列をなし、足音を忍ばせて次々と出ていった。

王宮の奥深く、息長皇后は八須女、香和女、葉津女の三人の宮女にかしずかれ、同じ言を繰り返していた。

「大伴の兵は、確かに吉備に着いたのであるな」

八須女は、同じ答えを繰り返した。

「確かに吉備に着いた。今宵変事が起きても、難波に戻るには六日かかる」

皇后は、魚油の灯火を見つめながら問うた。

「金村の邸には、とくに備えた様は見えぬな」

「常と変わらない」

八須女は、旦波に向かった大伴の軍の兵、住吉の大伴の本邸に仕える下部に、様々な財宝を渡し、何かあるごとに知らせるよう、手配りをしていた。

皇后を落ち着かせるように、八須女は、自信に満ちた声音で、すべては順調に進んでいることを告げつづけた。そして皇后は、すべてが順調すぎることに、不安を押さえきれなかった。

住吉の大伴の本邸に向かう桂木と平群の兵は二百。大伴の本邸を守る兵は五十。吉備にある大伴の兵四百五十は、あと六日は帰って来れない。

大伴を討ち、日継の皇子を奪い――あるいはその命を奪い――、その後、六日あれば、いかようにも策を施せる。吉備に向かった大伴の兵どもについては、すでに吉備の王が宴を開いて歓待し、その席に出す酒に毒を盛ることが決まっている。その半ばが生きながらえ、難波に戻ってこれたとしても、葛城や平群の兵で十分に迎え撃てる。

手抜かりはないはず……。

皇后はそう自らに言い聞かせるしかなかった。